

19世紀のロシア文語における 形容詞の結語の発達について

三 浦 元 俊

ロシア語の形容詞は他の言語の形容詞と同じように、従属語を伴って各種の結語体を組織する。この広汎な形容詞の結語力は形容詞が共通スラヴ語時代の語彙、意義論を基礎とした定語のカテゴリーから、現代のような形態論上のカテゴリーに発達するまでの長い、複雑な歴史的過程によって生まれたものである。この過程はロシア語の歴史的過去においても、また研究する時代においても、他の品詞の発達と緊密な関係をもつことは言を要しないところである。本拙論は19世紀のロシア文語における形容詞の結語の発達過程をロシア語史の見地から検討を試みたものである。以下順を追うて論旨を記してみよう。

1. 形容詞の結語の概念

ロシア語形容詞の結語の発達はロシア文語のシンタックス体系の発達と緊密に結びつくのである。本体系の一環である形容詞は結語にあたって、他の品詞、就中動詞の結語の影響を受けたのである。しかし形容詞の結語は本質的には、ロシア語に特有な結語法則、即ち結語規準、準結語規準、複雑な結語体の構成法、意義論上の要因、言語の名称表示の機能等の影響を受けるのである。しかしここで考えねばならないことはこの結語法則と雖も絶対的なものではなく、それぞれの結語体において、その基幹となる拡大語の性質が大きな支配力をもつことである。特に形容詞の結語においては、性質の概念を意義論上の基礎とする品詞に特有な現象を指摘することができるのである。この言わば、内在的なともいべき結語現象は形容詞の性質やそのカテゴリー上の特質によって生まれたものである。他言するならば、この結語現象は形容詞の語彙一文法上のカテゴリーの内部を古代から19世紀まで流れつづけた複雑な言語的長流に起因するものである。この歴史的発達過程を母体として生まれた形容詞の結語現象が形容詞の結語史の中で最も重要な位地を占めるのは当然のことと言わねばならないのである。

形容詞はその性質部門の発達によって、種々様々な結語現象を呈する。これらの現象を合一的な、共通的なものによって整理をすれば、二つのグループに分類することができる。第一のグループは形容詞の結語にとって共通的な現象、即ち形容詞の性質部門の発達に伴う結語の発達現象、形容詞がシンタックス上の機能によって結語体を組織する場

合、形容詞とその支配語間の相互関係、形容詞が構造、シンタックスの上で長語尾形容詞（性質の表現形式）と短語尾形容詞（性状の表現形式）とに二分されたこと等である。第二のグループにあげられるものは形容詞の各結語グループにとって特徴的な結語現象である。これらの結語現象は形容詞の結語体の中で特異的なものである。従ってこの種の結語体を蒐集して、検討すれば、性質形容詞のもつシンタックス機能の限界を究明し得るのである。この第二グループの結語体は形容詞の結語現象の中で最も重要視すべきものである。

2. 形容詞の結語に関する過去の研究の欠陥

形容詞の結語がロシア文語の中に広汎な普及を見るにいたったのは歴史的には比較的以後、いずれにせよ、動詞や名詞の結語以後のことである。しかし形容詞の結語については、現代ロシア語の領域においてモノグラフ式な研究も、系統的な解説も行われていないのである。ただ形容詞（特に短語尾形容詞）が無前置詞の名詞、有前置詞の名詞または或る種類の副詞と結合する能力をもつことが、その研究に深度の差はあれ、故人エム・ヴェ・ロマノフをはじめ、現代の多くのロシア語研究家によって指摘されているに過ぎないのである。これらの研究家は形容詞に附随して従属語を使用し得ることの確認、この確認のための引例、つまり本質的には、本問題の一般的解説に終始したのである。

今日までに本命題に捧げた多くの研究論文が発表されているが、それらの論旨は本質的には、次の諸点に帰着する。

1. 形容詞が従属語を支配する能力は動詞（一部は名詞）の影響のもとに生まれたこと。
2. 短語尾形容詞は長語尾形容詞よりも動詞に近いこと。短語尾形容詞は長語尾形容詞よりも名詞を支配する能力と副詞と結合する能力とが大きいこと。
3. 長語尾形容詞に附随して従属語を使用する場合は機能的、言わば文中における形容詞の役割に過ぎないこと。形容詞のこの支配力は所謂独立の定語の役割と述語の役割における長語尾形容詞の特徴と見做されること。
4. 形容詞の結語は現代のロシア文語においても使用性が少ないと考えられること。

しかしこれらの論旨は極めて形式的な主張で、本質的なものの究明を欠くのである。その本質的な欠陥は形容詞の結語の歴史的見通しの欠如、就中形容詞の結語の発達が形容詞の意義論の基礎である性質部門の発達と不可分の関係にある事実を完全に無視した点にある。

形容詞の結語の本質を究明するために19世紀の著名作品を検討した結果、形容詞の総てが必ずしも従属語を伴って拡大するものでないこと、つまり結語体を組織し得るものでないことが判明したのである。例えば物主形容詞が従属語と結合した用例は一つも見い出すことができなかったのである。また関係形容詞が従属語と結合して使用される場合も極めて制限的で、主として次のような結語体に限られるのである。

1. железные с резьбой ворота

(彫刻のある鉄門)

2. кружевной в кисти рукав

(袖口がレースの袖)

3. медный по краям

(銅縁の)

結語体を自由に組織し得るものは、本質的には、性質形容詞と性質的意義で使用されるその他の形容詞に限られるのである。従って従属語によって組織される結語体は性質形容詞に典型的な特徴である。この結語能力の伸張は、言うまでもなく、形容詞の意義論的基礎である性質部門の発達に左右されるのである。それ故に19世紀のロシア文語における形容詞の結語の発達過程を究明するためには、形容詞の発達史の中から、仮令僅少であるにせよ、最も重要視される結語資料を選出することが絶対に必要となってくるのである。しかし遺憾なことには、形容詞が共通スラヴ語時代の語彙を中心とした措辞論的カテゴリーから現代のような、形態論的に定義づけられた品詞に発達するまでの長い、複雑な歴史的過程はソ連においても、まだ細部にわたり研究されていないのである。しかしながらこの分野で行なわれた研究は19世紀における形容詞の結語の発達過程の究明に貴重な資料を提供しているのである。

3. 長語尾形容詞と短語尾形容詞の形成並びに両者の対立

ロシア語形容詞の生成と発達は共通スラヴ語時代に、スラヴ諸語の中に形成された定語が体験した語彙-措辞論的過程を母体としたのである。

エリ・ペ・ヤクビンスキーはこの過程をその著“古代ロシア語史”の中で次のように記している。“既に共通スラヴ語時代に、スラヴ諸語の中に定語の措辞論的カテゴリーが発達した結果、事物の名称を現わす語群の中から被限定物の特徴を他の事物に対する関係を経て現わす特殊な部属の語が分出されるにいたった。その後次第に、抽象的思惟が発達するにつれて、物の特徴はその性質上独立し、物とは別個に考えられるにいたった。その時、既に物の形象が消え失せた性質形容詞が誕生したのである。従って形容詞の語彙-措辞論的カテゴリーの形成並びに長語尾形容詞（或は代名詞型形容詞）の生成は共通スラヴ語の所産である。しかし形容詞の特殊な形態論上のカテゴリーは個々のスラヴ語の中に生まれたもので、しかもこのカテゴリーはスラヴ諸語のその後の発達とともに成長したのである。ロシア語においてもこれと全く同じことが言い得るのである。”

ここにおいて注目すべきことは、接尾辞一語尾（語原論的には代名詞）-ый, -ая 等により形態論上の語形を備えた形容詞の外に、このような語形を欠く、非代名詞型（或は名

詞型)の語形がロシア語の中で使用されていることである。本来、これらの語形はいずれも古代ロシア語の性質形容詞と関係形容詞に固有のものであった。既に古代から性質形容詞の分野において長語尾語形(代名詞型)と短語尾語形(名詞型)が両立し、しかもこの両語形は単に形態論の上においてばかりでなく、意義論の上においても相互に対立していたのである。前者は性質を表示し、後者は性状と性質とを表示していたのである。更にこの対立はシンタックス上の機能においても現われたのである。或る時代の間、長語尾形容詞は純限定詞の機能、即ち定語の役割をもって文中に進出し、短語尾形容詞は述語と定語の役割をもって進出していたのであるが、多くは述語の性格で使用されていたのである。

長語尾形容詞に特有な語尾は現代のロシア語においては被形容名詞と性、数、格の一致を示すための接尾辞として取り扱われているが、そのみに終わるものではない。本来この語尾は長語尾形容詞を短語尾形容詞から形態論的に区別したもので、早くも古代から形容詞と言うカテゴリーの形態上の特徴として進出していたのである。それ以来今日まで、この語尾は形容詞の基本的な、形態上の特徴、つまり形容詞と言う特殊な品詞の性質を示す特徴となっているのである。

上述のように、形容詞は古文書時代の当初から、現代のような独立せる一品詞としての形態を整えて、二つの語形グループ、長語尾語形と短語尾語形とに分かれていたのであるが、この分化は各グループが個々の独立せるカテゴリーとして必要な基本的特質(相異なるカテゴリー上の意義、相異なるシンタックス上の基本的機能、相異なる形態論上の構造)を備えていたことに起因するものである。従って形容詞が一品詞としての形態を備えるまでの過程は同時に、短語尾形容詞が長語尾形容詞から分離し、形容詞のカテゴリーから性状を現わすカテゴリーに移行するまでの極めて緩慢な発達をつづけた過程であると言い得るのである。

4. 形容詞の意義論的領域の発達と結語の要因

古代からはじまったロシア語形容詞の発達過程は、19世紀においても完結を見ていないのである。この過程は単調な、直線的に発達したのではなく、極めて複雑な、屢々対立をはらんだ過程であった。この過程の根底には上述したように、長語尾形容詞と短語尾形容詞が太古からもつカテゴリー上の意義の相違が存するが、最も重要なことはこの相異なった意義が二つの語形グループの中で絶えず発達をつづけたことである。この事実を解することなくして、形容詞の発達を論ずることはできないのである。長語尾形容詞と短語尾形容詞が語彙、意義論の上で分かれたこと、長語尾形容詞と短語尾形容詞が文構成の上で異なったシンタックス上の機能をもつにいたったこと、就中短語尾形容詞が限定詞としての機能を喪失し、これとともに語尾変化の機能(被限定名詞と性、数、格の一致)を失ったこと並びに長語尾形容詞が述語としての機能をもつにいたったこと。結論的には、従

属語によって拡大する能力が形容詞に発達したこと並びにこの能力を発揮するにあたって短語尾形容詞と長語尾形容詞がそれぞれ異なった座位を占めるにいたったこと。以上のような形容詞の発達現象は総て両語形がもつ相異なった、カテゴリー上の意義の発達に起因するからである。

勿論、長語尾形容詞がもつ従属語（被支配名詞と附加詞としての副詞）支配の能力は長語尾性質形容詞が述語として使用されたことに刺激をうけて発達したのである。しかしこの影響を長語尾形容詞と従属語との結合の発達における唯一の、決定的な要因と見做すことはできないのである。長語尾形容詞の述語的使用は形容詞自体の性質的意義の発達、短語尾形容詞と長語尾形容詞がもつ太古からのカテゴリー上の意義の相違等に起因するからである。また長語尾関係形容詞が述語として使用される場合に、従属語を伴わないこともその特性を物語るものである。しかし関係形容詞も言わば、半述語的機能で使用される場合にはこの法則に支配されず、その表現は個々別々である。

例

1. "Татьяна русская душою,
Сама не зная, почему
С ее холодною краскою
Любила русскую зиму..."
(Пушкин, Евгений Онегин)
2. "...из наших разговоров я вынес одно убеждение..., что
Петр Великий был по преимуществу русский человек, русский
именно в своих преобразованиях."
(Тургенев, Хорь и Калиныч)

しかし上例の関係形容詞 "русский" を見ると、その中に性質的意義のニュアンスを明瞭に感知することができる。従って関係形容詞の中に性質的意義（或は性質的意義のニュアンス）が発達し、それによって関係形容詞が性質形容詞の範疇に移行すれば、通常関係形容詞は従属語と結合して使用し得るのである。"русская зима", "русская литература" "русская армия" 等の一連の結語体はその好例である。

ソ連の語史研究家は従属語が述語としての長語尾性質形容詞に附随して使用された文例は16世紀の文献にはなく、17世紀にいたってようやく文献の中に現われたこと。しかもその当時それらの結語体が広汎に使用されたものでないこと。若干の談話文体の中に従属語を伴った長語尾形容詞が述語として極めて少数現われたこと。他言すれば、このような結語に使用される従属語の領域が非常に狭かったこと等を指摘している。要するに長語尾形容詞を基幹語として構成される結語体が広汎に使用され、その体形が可なり多形化したのは18世紀の末期から19世紀の初頭にかけてのことである。

5. 18世紀後半から19世紀における形容詞の結語の発達過程

ロシア語形容詞が共通スラブ語時代に、物と物との対比から得た性質的意義は17世紀から18世紀にかけて躍動し、18世紀の末葉から19世紀にわたって特にめざましい発達を遂げたのである。この時代における形容詞の性質部門の発達は進度や激度においても、またその内容においても特筆すべきものであった。この結果、形容詞の語彙一意義論的領域の拡充、性質形容詞の領域の拡大、形容詞の結語方式の発達、長語尾性質形容詞のシンタックス機能の拡充、多種多様な結語体の急速な増大並びにロシア文語におけるその使用の拡大等の一連の発達現象を生むにいたったのである。

次に、形容詞の結語の発達過程を時代を追うて詳述してみよう。18世紀の後半にいたり名詞の属格、前置詞と結合した名詞の変化格並びに副詞が短語尾形容詞ばかりでなく、長語尾形容詞にも附随して広汎に使用されはじめたのである。これらの結語体は形態の多形化の点では特に見るべきものがないが、その当時の種々の文献の中に現われた結語体のうちから特殊のものをあげてみよう。

1. "Пойдем тотчас в армию и сделаемся достойными звания дворянина."
(Фонвизин, Недоросль)
2. "Еще Вас прошу, оставьте сие не свойственное Вам искусство..."
(Новиков, Трутень)
3. "В самый первый день похищена я в сие несносное для меня и страшное жилище."
(Чулков, Пересмешник)
4. "...мы возвели на престол, продолжал он, весьма попечительного о подданных государя..."
(там же)
5. "Чуждый надежд и мзды, чуждый рабского трепета, он твердым гласом возвестит меня тебе."
(Радищев, Путешествие)
6. "Мы приехали в Монпелье в самое авантажное для него время."
(Фонвизин, Письма)

7. "...а просвещенному Зрелому и подобным ему разумным
людям ничто удивительно быть не может..."
(Новиков, Трутень)

前述のように、性質形容詞の領域は18世紀の末期から19世紀にわたって著しく拡大し、多種多様な結語体が急速度をもってロシア文語の中に進出したのである。既にエヌ・エム・カラムジンの作品の中には19世紀末葉から20世紀初頭のロシア文語の中に現われた形容詞結語体の大部分が見られるのである。彼の使用した結語体は勿論、使用度においても、また形態においても決して一様ではなかった。その中の或るものは20世紀初頭と全く同じような形態で使用されているのである。例えば、次のような結語体をあげることができる。

1. 前置詞なしで従属名詞の与格を結合したもの

свойственный ему (彼の本来の)

малый сердцу (小心の)

2. 前置詞 **для** を伴って、従属名詞の生格と結合したもの

любезный для него (彼にとって愛しい)

печальный для нее (彼女にとって悲しい)

この結語体はエヌ・エム・カラムジンの作品の中で「1」の結語体と競合的に使用されている。本結語体の使用は当時の時代的傾向であった。

3. 前置詞 **в** を伴って、従属名詞の前置格と結合したもの

величественная в своем течении река (流れの荘重な河)

счастливый в своих предприятиях человек (企業運に恵まれた人)

この結語体は使用度において「4」の結語体に多少劣る。

4. 前置詞なしで従属名詞の造格と結合したもの

славный своими фабриками человек (工場で名声をあげた人)

5. 前置詞 **по** を伴って、従属名詞の与格と結合したもの

известный по своим суконным фабрикам человек

(ラシャ工場で名の知られている人)

この結語体は「4」の結語体と互角に使用されている。

更にエヌ・エム・カラムジンの作品を検討すると、少数ではあるが、従来には見られなかった結語体を指摘することができる。例えば、次のような結語体である。

1. 前置詞 **от** を伴って、従属名詞の生格と結合したもの

оторопелый от смущения человек (狼狽のあまり茫然とした人)

2. 前置詞 **до** を伴って、従属名詞の生格と結合したもの

до крайности говорливый человек (実に多弁な人)

3. 性質副詞と結合したもの

величественно спокойный (泰然自若たる)

これらの結語体は19世紀の末期には広く使用されるにいたったのである。

19世紀は形容詞の性質部門が飛躍的な発達を遂げた時代であった。この発達は二つの路線に沿って行なわれたのである。その一つは物と物との対比から物の性質的意義を取得する従来の方式である。この方式は19世紀にはいり次第に弱まり、直接物の性質を描写する方式に一変し、更に物の絶対的性質を抽象化された意義で捉える方式に進んだのである。これが第二の路線である。この発達現象は形容詞の結語にも反映し、従来に見られなかった結語体がロシヤ文語の中に現われたのである。従って19世紀は形容詞の結語にとっても劃期的な時代であったと言い得るのである。

次に、当時代に使用された結語体の中から特徴的なものをあげてみよう。

1. "Я...почитал себя уже совершенно светским и обхождение
знающим человеком..."
(Болотов, Записки)
2. "...и все вместе составляло нечто весьма Оссианское."
(Карамзин, Письма русского путешественника)
3. "Насчет занятия первых мест происходило тоже множество
весьма сильных сцен, внушавших мужьям иногда совершенно
рыцарские, великодушные понятия..."
(Гоголь, Мертвые души)
4. "...и немного спустя вошел в контору человек низенького
роста, чахоточный на вид..."
(Тургенев, Контора)
5. "Хорош ли он? Это...как кому нравится, но, по его мнению,
у него лицо слишком выставочное, так сказать парик-
махерское."
(Куприн, Страшная минута)
6. "Он воображает меня мертвою для всех чувств
добродетели!"
(Карамзин, Юлия)

しかし個々の形容詞のもつ性質的意義にも濃淡があり、またその性質的意義と物的意義との関係も決して一様ではない。従って形容詞のもつ結語力についても同じことが言い得

るのである。即ち或る形容詞においてはその結語力が大きく、他の形容詞のそれは制限的であり、第三の形容詞においては結語能力が潜在すると考えられているに過ぎないのである。かかる結語上の要因を理解することも形容詞の結語を究明する上に極めて重要なことである。

6. 19世紀における外来語形容詞の結語の発達過程

ロシア語形容詞の中で色調を現わす形容詞が18世紀から19世紀にかけて、多数の外来語によって補充された。その結果 **"розовый"** (バラ色の), **"бордовый"** (暗紅色の), **"оранжевый"** (オレンジ色の), **"лиловый"** (藤色の), **"фиолетовый"** (スミレ色の), 次いで **"шоколадный"** (チョコレート色の), **"кофейный"** (コーヒー色の), **"миндальный"** (バラ色の) 等の外来語がロシア語の中で常用されるにいたったのである。これらの一連の形容詞は当初、従属語との結合においても、また結語体の多形化においても純ロシア語形容詞より遙かに劣っていたのである。しかしこの外来語グループにも次第に結語能力が増大したが、その結語体は19世紀においては比較的少数であった。またそれは形態においても、内容においても単調で、特に見るべきものはないのである。

次に、19世紀における外来語形容詞の結語体の主なるものを示してみよう。

1. "Он встретился с белоногим рыжим Гладиатором Махотина, которого в оранжевой с синим попоне...вели на гипподром."
(Л. Толстой, Анна Каренина)
2. "Другой подал Палтусову его мохнатое, лиловое с черным, одеяло..."
(Боборыкин, Китай—город)
3. "Встревоженные тихим движением лодки...лениво расплываются в обе стороны морщинки, розовые от последних лучей солнца."
(Куприн, Прапорщик армейский)

しかし上記の形容詞は19世紀の末期にはいり、特に20世紀において、本来の具象的な意義の外に、抽象化された転移的な意義においても各種の結語体を組織して、活潑に使用されるにいたったのである。

次に、外来語形容詞の結語の発達過程を用例で示してみよう。

1. "Боже мой, совершенные опята!... Да не жареные, а свежие, только что снятые с гнилого пенька! Такие розоватые со ржавчинкой..."
(Федин, Необыкновенное лето)
2. "Истомную скуку делил с ним красавец-пойнтер, шоколадной в белых крапинах масти."
(Шолохов, Тихий Дон)
3. "Николай Иванович выслушал ее до конца... с удивлением взглядывая на миндальные от негодования дашины щеки..."
(А. Толстой, Хожение по мукам)
4. "Степан Аркадьич осторожно улыбнулся своей миндальной улыбкой."
(Л. Толстой, Анна Каренина)
5. "На лице у Марьи Константиновны задрожали все черточки..., она миндально улыбнулась и сказала восторженно, задыхаясь..."
(Чехов, Дуэль)

7. 19世紀における動詞型及び形動詞型形容詞の結語の発達過程

外来語形容詞に次いで、ロシア語の性質形容詞を補充したものは動詞から派生した形容詞である。この場合二つのタイプが考えられる。その一つは動詞の語幹から派生した形容詞であり、他は性質的意義の発達した形動詞から転じた形容詞である。これらの形容詞の性質的意義の発達並びにこれに伴う結語能力の伸張を究明するためには動詞から派生した **-тельн** の接尾辞をもつ形容詞、例えば **"утомительный"** (飽々させる), **"привлекательный"** (魅力的な), **"замечательный"** (注目すべき) **"выразительный"** (表情にとも) 等の一連の形容詞を研究すれば足りるのである。

このグループの形容詞は形成後長い間、形動詞 (**-щий** を語尾とする形動詞) と同意義で使用されていたのである。ロシア語史研究家ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ及びその他の研究家はこの種の形容詞が18世紀末葉から19世紀初頭にかけて、形動詞の意義で使用されていた事例、即ち **"замечательный"** は **"замечающий"** (心にとめる) の意義で、また **"решительный"** (決定的な) は **"решающий"** (決定する) の意義で使用されていた

ことを指摘しているのである。しかし19世紀の中葉にはいり、これらの形容詞はこのグループの他の形容詞と同じように、性質的意義においても使用され、19世紀の末葉においてはこの後者の意義が支配的となったのである。

しかしこの種の形容詞は形動詞と意義の上で、関連的な似類性をもつことは否定できないが、結語体を組織する場合には両者間に明確な一線を劃している。即ち形容詞においては **для** 生格或は前置詞なしの与格が従属語の語形となるが、形動詞においては目的語たる対格がその従属語となるのである。従って前者はパッセブ的な機能であり、後者はアクティブ的な表現と言い得るのである。

例

- | 形 容 詞 | 形 動 詞 |
|---|--|
| 1. унижительный для него
(彼にとって屈辱的な) | : унижающий его
(彼を辱めるところの) |
| 2. привлекательный для меня
(私にとって魅惑的な) | : привлекающий меня
(私を魅了するところの) |
| 3. одобрительный ее туалету
(彼女の化粧振りが称賛的な) | : одобряющий ее туалет
(彼女の化粧振りをほめたゝえるところの) |

次に、19世紀に使用された動詞型形容詞の結語体の主なるものを示してみよう。

1. "Печальное платье, бледное лицо и томность в глазах делали ее привлекательной для меня..."
(Карамзин, Письма русского путешественника)
2. "Ростовы предполагали, что русская гвардия за границей есть совершенно определительный адрес..."
(Л. Толстой, Война и мир)
3. "Она сделала чуть заметное, но понятное для Кити, одобрительное ее туалету и красоте движение головой."
(Л. Толстой, Анна Каренина)
4. "Самое мучительное для кавалерийской лошади, это затянутое ее положение под тяжелым выюком..."
(Фет, Мои воспоминания)
5. "Чтобы не продолжать этой жизни, позорной для нее и оскорбительной для Лаевского, она решила уехать."
(Чехов, Дуэль)

しかしこれらの形容詞の中には、形動詞型語形をもった同意義語に駆逐されて、廃語となったもの或は稀用語となったものが若干ある。

例

- | 廃 語
(または稀用語) | 代 用 語 |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. умоли́тельный
(懇願的な) | : умоля́ющий |
| 2. блиста́тельный
(さんぜんたる) | : блестя́щий |
| 3. опреде́лительный
(確定的な) | : опреде́ленный |

動詞から派生した形容詞のグループの中には上記の形容詞の外に、**-мый** を語尾とする一群の形容詞（大部分 **не-** なる接頭辞を首頭にもつ）がある。これらの形容詞は動詞的意義ではなく、純性質的意義で、自由に従属語と結合して、常用されている。

次に、その結語体の主なるものを示してみよう。

1. "И те, и другие хранят внутри себя… тайну, может быть, недостижимую для человека в сей жизни…"
(Одоевский, Русские ночи)
2. "…но и тут сколько препятствий, для меня неодолимых!"
(Пушкин, История села Горюхина)
3. "Казалось, весь ум ее сосредоточивался на желании сказать мужу самое обидное, самое невыносимое для любящего."
(Фет, Мои воспоминания)
4. "Генерал, — отвечал я с нестерпимым для него спокойствием…"
(Достоевский, Игрок)

18世紀の末期からはじまった形動詞の“性質取得”の過程は19世紀にはいり活潑な現象となった。この現象をロシア語史研究家 ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフは次のように説明している。“19世紀にはいり、ロシア語の文法体系の中で性質部門の占める役割が増大し、他方形動詞が、文体論上の制約をうけていた高度の文章語のカテゴリーから一般文語のカテゴリーに移行し、ロシア文語の中で可なり広く使用されるにいった……。この二つの現象が形動詞の“性質取得”の過程を促進したのである。”

この結果、19世紀において、形動詞から転じた各種の形容詞が現われたのである。その第一は動詞的性格を失って、形容詞化した形動詞群である。

例

1. согбенный (曲がった)
"зодчие, согбенные над чертежом"
(Радищев)
(図面の上に背を曲げている建築家)
2. надменный (不遜な)
"надменный в сношениях с людьми самого высшего звания"
(Пушкин)
(最高の地位にある人々を遇するのに不遜な……)
3. незабвенный (忘れぬ)
"ты, незабвенная и в дикой пустыне"
(Жуковский)
(君よ、荒野の中でも忘れぬ君よ)
4. откровенный (率直な)
обыкновенный (通常の) 等

次は、能動形動詞または被動形動詞の同音異義語として現われた一群の形容詞である。

例

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 能動形動詞 | 形容詞 |
| блестящий (輝くところの) | блестящий (さんぜんたる) |
| вызывающий (呼び出すところの) | вызывающий (挑戦的な) |
| знающий (知っているところの) | знающий (精通した) |
| умоляющий (懇願するところの) | умоляющий (哀願するような) |
| 2. 被動形動詞 | 形容詞 |
| избитый (打ちのめされた) | избитый (使い古された) |
| образованный (形成された) | образованный (教養のある) |
| разбитый (こわされた) | разбитый (ぐったりした) |
| сосредоточенный (集中された) | сосредоточенный (緊張した) |

形動詞から転じた上記の形容詞は独特な語形をもって、形容詞の結語体系の中に進出し、種々の従属語を伴って発達したのである。しかし形容詞化の過程で多少遅れをとったことは否定できないのである。この現象は従属語、特に前置詞とともにまたは前置詞な

しで従属する名詞，就中直接目的語としての名詞の対格（形容詞の語形は **-ут-, -ют-, -ат-, -ят-**，の接尾辞をとる）と活動体名詞或は非活動体名詞の造格（形容詞の語形は **-нн-, -т-**，の接尾辞をとる）とが形容詞の動詞的性格と動詞への従属性を強めていることに起因するのである。従ってこれらの形容詞が一般形容詞に伍して，結語体を組織し得る場合はその性質的意義が最大限に発達した場合に限られるのである。これらの形動詞型性質形容詞を使用する場合に，その首頭に屢々副詞（主として程度を示す副詞）を置くのであるが，この副詞もその語が形動詞として使用された場合には認められないのである。例えば **"очень образованный человек"**（教養豊かな人）と言う場合には副詞 **"очень"**（非常に）の使用が認められるが，**"изгиб, образованный рекой"**（河でつくられた彎曲部）と言う場合には認められないのである。

次に，19世紀に使用された形動詞型形容詞の結語体の主なるものを示してみよう。

能動形動詞型形容詞

1. **"Губернатор наш был гораздо степеннее и разумнее Корфа и во всех делах несравненно более знающ."**
(Болотов, Записки)
2. **"Во-первых, женитьба была не блестящая в отношении родства, богатства и знатности."**
(Л. Толстой, Война и мир)
3. **"...сияющие радостью, разодетые, дети стояли у крыльца пред коляской, дожидаясь матери."**
(Л. Толстой, Анна Каренина)
4. **"—Но прошу же Вас,—начал он совершенно умоляющим голосом,—оставьте все это!"**
(Достоевский, Игрок)

被動形動詞型形容詞

1. **"Отлично образованный по тогдашнему времени,...Волчков вступил в военную службу..."**
(Жихарев, Дневник чиновника)
2. **"...и вслед за ней появился человек среднего роста, в синем, сильно потертом сюртуке..."**
(Тургенев, Льгов)

3. "Фу ты, боже мой—говорят они, наконец, разбитым от волнения голосом..."
(Тургенев, Татьяна Борисовна и ее племянник)
4. "...и отец, вздохнув и очевидно смущенный, весьма скоро прервал свою речь и пошел к графине."
(Л. Толстой, Война и мир)

8. 結 論

脱稿にあたり、論旨を要約して結論を記してみよう。

1. ロシア語形容詞は古代ロシア語時代から二つの語形グループ、長語尾語形と短語尾語形とに分かれていたのであるが、この分化は各グループが個々の独立せるカテゴリーとして必要な基本的特質を備えていたことに起因する。この相異なったカテゴリー上の特質がこの二つの語形グループの中で絶えず発達をつづけたことが形容詞の結語の発達の本質的な要因である。
2. 形容詞の結語体がロシア文語の中に波及するにいたったのは歴史的には遅く、本質的には、形容詞の性質部門が躍動しはじめた18世紀後半である。19世紀にはいり形容詞の性質部門が著しく発達し、また外部から形容詞の領域に性質的意義の発達した一連の形動詞型形容詞が加わり、形容詞は意義においても、また領域においても未曾有の発達を遂げた。この結果、各種各様の形容詞結語体がロシア文語の中に進出したのである。形容詞の意義の変遷、新しい性質的意義の取得、これに伴う結語方式の発達等の研究は今後の課題である。